トスカナ式柱頭に関する議論

フランス王立アカデミー(1671-1793)に関する研究 その7

DISCUSSIONS ON THE TUSCAN CAPITAL

A study on the French Académie Royale d'Architecture (1671-1793) Part 7

土居 義岳*

Yoshitake DOI

The *Académie Royale d'Architecture* discussed especially two aspects of the Tuscan capital, that is, the vertical proportion of three parts (abacus, echinus, and necking), and the mouldings in the abacus and under the echinus.

First, the Academy approved Vitruvius' system interpreted by S. Serlio, then that interpreted by Cl. Perrault for a short period, and finally, as early as the beginning of the 18th century, the proportion and the moulding of the Tuscan capital of the *orangerie* in the Versailles Palace, designed by François Mansart. The *Académie* admitted also Vignola's Tuscan capital that presents similarity to Mansart's one.

This paradigm shift from the antique architecture to the French classical architecture preceded that of the general proportion system of the five ordres.

Keywords : *Académie Royale d'Architecture, Tuscan order, capital, Claude Perrault, Antoine Desgodetz, François Mansart*

フランス建築アカデミー、トスカナ式オーダー、柱頭、クロード・ペロー、アントワヌ・デゴデ、フランソワ・マンサール

1. 序

フランスの王立建築アカデミーは毎週の会合で建築オーダー比例を議論しつつ、第1期(1671-1715)には古代ローマ建築を、第2期(1734-1750)には17世紀のフランス古典主義の建築を模範とした¹⁾。すなわち一種のパラダイム・シフトがあった。本稿では、トスカナ式柱頭にかんする議論にも、こうした変化が認められるかどうか、そうだとしたら、全体の議論といかなる関係にあるかを論じる。

柱頭をなす3層を上から「アバクス²⁾」、「エキナス³⁾」、「頸部⁴⁾」と呼ぶことにすれば、主要な論点は以下の3点であった。

- (1) アバクス上端に小平縁があるかどうか。
- (2) エキナス下にある刳型の種類と帰属、すなわちそれがエキナス層か頸部のいずれに属するか。
- (3) 頸部の下の刳型は、柱頭か柱身のいずれに属するか。

上記の3点がウィトルウィウス以降どう規定されたかを遡及して概説したうえで、アカデミーがこの伝統を前提に独自の比例体系をどう推敲したかを、以下に述べる。

なお本稿では、上記3層を第1層～第3層と呼び、柱頭の幅とはアバクスの幅を意味し、その半分を「(柱頭の)半幅」と呼ぶ。「張出し」とは、柱身上部の表面からアバクス先端までの距離、1M(モジュール)は柱身下部直径の1/2、1P(パルティ)は1/30M、とする。

2. ウィトルウィウスの規定

森田慶一訳『ウィトルウィウス建築書』第四書第七章の第3節によれば、高さは1M、全幅は2Mであるが、高さは3分割され、そのうちの1部分がアバクス、ほかの1部分がエキナス、そして「第三の一部分がアポピュシスを付けた頸部に与えられる⁵⁾」。森田によれば、「アポピュシス apophysis」は「アポテシス apothesis」と同義であり、その意味は「柱身から柱頭へ、あるいは柱礎へ、移行する逃げの部分⁶⁾」である。文字どおり解釈すれば、それは柱身上端にある小平縁にいたる直前の、四分の一円輪郭の部分であり、日本語で「根広」とも呼ばれる箇所を意味している。この説明では、柱頭高さ1Mなどは明快であり、後世の建築家はほとんどこれに従っている。しかし上記の「アポピュシス」は頸部の上端か下端かが曖昧であるなど、細部についてはかならずしもそうではなく、さまざまな解釈が生じる原因となった。

3. イタリアのルネサンス期の建築家たちによるトスカナ式柱頭

セルリオは『建築第IV書』(初版1537年)第5章で、ウィトルウィウスを引用し、さらに補足しつつ柱頭の比例を説明している(図3)。柱頭全体の高さや、高さが3等分されて3層にあてられる点や、幅については彼を踏襲しているが、次の2点で詳細になっている⁷⁾。

- (1) エキナス層は4等分され、その3が、エキナスに、残りの1

* 九州芸術工科大学環境設計学科 教授・工博

Prof., Dept. of Environmental Design, Kyushu Institute of Design, Dr. Eng.

建築家名	柱頭 全高	主要 3 部分の高さと割型						柱頭の 半分 A+B	柱頭上 端の半 径 A	柱頭の 張出し B	対 応 図	出典・備考
		アバクス		エキナス層		頸部						
ウィトルウィウス	30		10	10			10	30	22 1/2	7 1/2		森田慶一訳『ウィトルーウィウス建築十書』第四書第七章 2,3 節
	30	-	10	10	-	af	10	30	22 1/2	7 1/2	1	Perrault, <i>Les Dix Livres de Vitruve</i> , 1673, p.137
トラヤヌス記念柱	20	-	11	10 1/2	af	-	-	34	26	8	2	Fréart de Chambray, <i>Parallèle...</i> , 1650, p.91
セルリオ	30	-	10	10	f	-	10	30	22 1/2	7 1/2	3	Selio, 4 th book, 5 th ch., fol.4 (ウィトルウィウスに準拠)
ヴィニョーラ	30	f	10	10	f	-	10	36 1/4	23 3/4	12 1/2	4	長尾重武編『建築の五つのオーダー』Ⅶ章 (1M=12P を 1M=30P に換算)
パラディオ	30	-	10	10	f	-	10	30	22 1/2	7 1/2	5	<i>Les Quatre Livres</i> , édité par De Chambray, liv.Ier, ch.XIV, p.47
	30 1/2	fc	11	9 1/2	-	f	10	36	26	10	6	同上
スカモッツィ	30	f	10 1/2	10	a	f	9 1/2	31	22 1/2	8 1/2	7	<i>Les cinq orders...</i> , édité par D'Aviler, p.57
ドロルム	30	-	10	10	f	-	10	30	22 1/2	7 1/2	8	<i>Le Premier Tôme</i> , liv.V, ch.VI
	30	f	10	10	f	-	10	31 1/2	24	7 1/2	9	<i>Le Premier Tôme</i> , liv.V, ch.IX
ビュラン	30	-	10	10	f	-	10	31	22 1/2	7 1/2	10	Bullant, <i>Reigle générale...</i>
ブロンデル	30	-	10	10	f	-	10	30	22 1/2	7 1/2	11	<i>Cours...</i> , 1683, I ^{er} partie, liv.II, ch.I, p.25
ペロー	30	-	10	10	-	af	10	34	25	9	12	<i>Ordonnance...</i> , 1683, p.42bis, pl.III
	30	-	10	10	f	-	10	35	25	10	13	<i>Architecture Civile</i> , pp.86-87, pl.14
ラ・イール	30	f	10	10	f	-	10	37 1/2	25	12 1/2	13	同上
デゴデ	30	f	11	9	f	-	10	37 1/2	25	12 1/2	14	<i>Traité...</i> , ch.III, V dessein
タヌヴォ	30	f	10 2/3?	9 2/3?	f	-	9 2/3?	40?	26 1/4	13 3/4	15	B.I.F., Ms1026, pl.11 (1M=12P を 1M=30P に換算)
ロリオ	30 5/8	f	11 1/4	10 5/16	f	-	9 1/16	40	25 5/8	14 3/8	16-18	A.I.F., Papier Beausires, B13-7-2°-2, B13-7-2°-4

表 トスカナ式柱頭の比較。なお、単位はパルティ (=コラム下部半径×1/30)。各行で、数値の左側にあるローマ字はその層の上端の割型を、右側にあるローマ字はその層の下端の割型を示す。A:玉縁 (astragale)、c:カヴェット (cavette)、f:小平縁 (fillet)、?:図版よりの推定、af:玉縁と小平縁。

B.I.F. = Bibliothèque de l'Institut de France (フランス学士院図書館)、A.I.F. = Archives de l'Institut de France (フランス学士院古文書室)

が小平縁に与えられる。

(2) 頸部の下にある玉縁と小平縁は、柱身に属するものとして、寸法が記述されている。両割型をあわせた厚みは頸部のその 1/2 であり、それが 3 等分され 2 が玉縁に、1 が小平縁に与えられる。

すなわちエキナス直下にある割型はエキナス層に属し、頸部直下の割型は柱身に属する。一方、アバクスには割型はない。

ヴィニョーラは、垂直方向の比例ではセルリオに従っている (図 4)。しかしアバクス上端に小平縁がある点で、彼とは異なっている⁹⁾。

パラディオはその『建築四書』において 2 種類の柱頭を提案している。第 1 (図 5) はウィトルウィウスのものとして紹介されており、アバクスには割型がなく、全体として簡素な印象を与える。しかし割型の位置についてはセルリオとは異なる解釈を示している。全高は 3 等分されるが、その第 2 の部分がエキナス全体に与えられ、エキナスはかなり厚く (10P) なっている。いっぽうエキナス直下の小平縁は頸部に属するものとされている⁹⁾。第 2 (図 6) はヴェローナの闘技場や、プーラの闘技場と劇場などの古代建築を参考にして作成されたもので、アバクス上端には小平縁とカヴェット、第 2 層には四分の一円輪郭のエキナスではなくシーマがあるなど、装飾的である¹⁰⁾。

スカモッツィは、柱頭の高さが 3 等分されるというふうには説明していない¹¹⁾。実際、等しい高さの 3 層には区分できない (図 7)。割型がどの層に含まれるのかは曖昧である¹²⁾。細部については、アバクス上端に小平縁があり、エキナス直下に玉縁と小平縁があるのが特徴的である。ただしこうした割型が選ばれた理由は明記されていない。

ルネサンスにおいてはウィトルウィウスのセルリオの解釈が有力であったが、パラディオにおいては古代建築の実例の名のもとに、スカモッツィにおいてはおそらく一般的な反ウィトルウィウスの方針¹³⁾によって、そこから逸脱することが試みられたと考えられる。

4. フランスの建築家によるトカナ式柱頭

4.1 アカデミー以前の建築家たち

フィリベール・ドロルム¹⁴⁾はその『建築第 I 巻』(1567) において 2 種類のトスカナ式柱頭を紹介している。第 1 (図 8) はウィトルウィ

ウスやセルリオに忠実なものであり、高さは 1 M、幅は 2 M、高さは 3 等分されるが、エキナス層は小平縁を含む¹⁵⁾。しかしより詳細に記述された第 2 例 (図 9) では、垂直方向の比例はほぼウィトルウィウスのセルリオ的解釈を踏襲しているが、アバクス上端に厚い (5P) 小平縁がある点で異なっている。一方、ジャン・ビュラン¹⁶⁾が『コラムの 5 種類の様式にかんする建築の一般法則』(1654) で紹介したトスカナ式柱頭 (図 10) は、ほぼ完全にセルリオの比例に従っている¹⁷⁾。

一般的にはウィトルウィウスのセルリオの解釈が尊重されたようである。

4.2 クロード・ペロー¹⁸⁾によるウィトルウィウス解釈

クロード・ペロー訳『ウィトルウィウス建築十書』(初版 1673 年) においては、トスカナ式柱頭の比例は、以下のように説明されている。

「柱頭の高さはコラムの太さの半分で、アバクスの幅はコラムの太さ全体に等しい。柱頭の高さは 3 等分され、そのうち 1 がアバクスとなる角板¹⁹⁾に、ほかの 1 がエキナスに、第 3 の 1 が、玉縁とアポテシス²⁰⁾ (congé) を含む頸部に与えられるべきである²¹⁾」

先に引用した、比較的原著に忠実な森田慶一訳では第 3 の 1 部分が「アポテシスを付けた頸部」に与えられるとあるが、ペロー訳では「玉縁とアポテシスを含む頸部」となっている。

ペローは「第 3 の 1」についての脚注で、このように解釈した理由を次のように述べている。『建築十書』のすべての異本において、この箇所は「第 3 の 1 は頸部とアポテシスにあてられる *tertia Hypotrachelio & apophygi*」とあるが、フィランデル²²⁾版では「第 3 の 1 は玉縁とアポテシスを含む頸部にあてられる *tertia Hypotrachelio cum astragalo & apophygi*」と修正されており、この修正には同意できる、と。

しかしペローは「玉縁とアポテシス」が頸部に含まれることは同意したが、これらの割型が頸部の上端にあるか下端にあるかという点では、フィランデルに同意していない。すなわちフィランデル版では、ウィトルウィウスは頸部の下すなわち柱身の上端の玉縁とアポテシスを語っているとして、ペローは次のように批判した。

「ウィトルウィウスが述べている玉縁とアポテシスは、コラムの柱身の

図1 ペローがウィトルウィウスに基づいて作成したトスカナ式オーダーと、その部分拡大の分析 (Perrault, 'Les Dix Livres de Vitruve', 1673, liv.IV, ch. VII, p.137)。左端はペロー解釈によるもの、'A'はフィランドル、'B'はセルリオとヴィニョーラ、'C'はバラディオの例。

図2 トラヤヌス帝の記念柱 (Fréart de Chambray, 'Parallèle de l'architecture antique et de la moderne', 1650, p.91)

図3 セルリオがウィトルウィウスに基づくものとして紹介した柱頭 (S. Serlio, 'The Five Books of Architecture', (English translation) 4th book, 5th ch., fol.4)

図4 ヴィニョーラ案 (長尾重武『ヴィニョーラ 建築の五つのオーダー』Ⅷ巻)

図5 ウィトルウィウスに従ったとするバラディオ案 (Palladio, 'Les quatre livres de l'architecture', traduit par Fréart de Chambray, 1650, liv.Ier, ch.XIV, p.47)

図6 ヴェローナの騎兵場等の例に従ったとするバラディオ案 (Palladio, op.cit., liv.Ier, ch.XIV, p.48)

図7 スカモッツィ案 ('Les cinq ordres d'architecture de Vincent Scamozzi', traduit par D'Aviler, 1685, ch.XVII, p.57)

図8 ドローム案① (De L'Orme, 'Le Premier Tome de l'Architecture', 1567, liv.V, ch.VI)

図9 ドローム案② (op.cit., liv.V, ch.IX)

図10 ビュラン案 (J. Bullant, 'Regle générale d'architecture...', 1654)

図11 ブロンドル案 (Fr. Blondel, 'Cours d'architecture', 1er partie, 1675, liv. II, ch.I, p.25)

図12 ペロー案 (Perrault, 'Ordonnance des cinq espèces de colonnes selon la méthode des Anciens', 1683, p.42bis, pl.II)

図13 ラ・イール案 (La Hire, 'Architecture Civile', 1690s, pp.86-87, pl.14)

図14 デゴデ案 (Desgodetz, 'Traité...', ch.III, V.dessein)

図15 タヌヴォ案 (B.I.F., Ms.1026, pl.11)

図16 フランソワ・マンサールが設計したヴェルサイユ宮のオランジュリ (オレンジ用温室) (左) 柱頭の詳細 (中央の図面の部分拡大)、(中央) 側面ポーチのトスカナ式オーダーの全体図、(右) 平面図 Alfred et Jeanne Marie, 'Mansart à Versailles', 1972, t.I, pp.281-284

図17 A.I.F. (フランス学士院古文書室), P.B. (ボジュール図面集), B13-7-2°-2 と B13-7-2°-4に描かれたトスカナ式柱頭の輪郭

図18 ロリオが作図したとされるヴェルサイユ宮のオランジュリーのトスカナ式柱頭の図面 (A.I.F., P.B., B13-7-2°-2)

図19 ロリオが作図したとされるトスカナ式柱頭の図面 (A.I.F., P.B., B13-7-2°-4) (左) ヴェルサイユ宮のオランジュリーの例 (右) ヴィニョーラのトスカナ式柱頭

一部である玉縁とアポテシスというよりは、柱頭の 1 部分であるべきであると私は信じる²³⁾」

この一節を、この脚注の説明のための挿図(図 1)と比較すれば、彼は「玉縁とアポテシス」はエキナスの直下と柱身の最上端の 2 箇所にあるべきであり、ウィトルウィウスはその前者のものを述べている、と考えていたことは明白である。また図版から明らかなように、彼は「玉縁とアポテシス」と言いながら、実際は、玉縁と小平縁と根広(アポテシス)を描いている。あるいはアポテシスという言葉をもって小平縁と根広の両者を意味しようとしていた、とも考えられる。

彼は同じ脚注で、トラヤヌス記念柱とスカモツツィの例をもって自説を正当化した²⁴⁾。実際、これらの例ではエキナス直下に玉縁と小平縁があり、必然的にその小平縁の直下にはアポテシスがある。(図 2,7)

彼は、イタリアの建築家による柱頭をも検討している。セルリオとヴィニョーラによる柱頭については、「ウィトルウィウスは柱頭の第 2 層全体をエキナスに与えた」のに、彼らは第 2 層のなかにエキナスと小平縁を含めっていると批判した。パラディオについては、その第 2 層全体をエキナスに与えているが、そのエキナス直下には「玉縁がない」と指摘している²⁵⁾。(図 1,3,4,5)

またペローは『古代人の手法にもとづく五種類のコラムのオールドナンス』(1683)のトスカナ式オーダーの章のなかで、『建築十書』の脚注で論じたことを、よりくわしく論じなおしている。この書は彼自身の比例体系の提案でもあり、諸例から彼が最良と考えるものを積極的に選択し提案している。彼は「性格 caractère」すなわち割型²⁶⁾による分類と「比例 proportion」による分類を区別し、さまざまな例を比較した。まず「性格」については、以下のように述べている。

「パラディオ、セルリオ、それからウィトルウィウス、トラヤヌス記念柱においては、アバクスはまったく単純でありシーマはない。ヴィニョーラとスカモツツィはシーマではなく小平縁をつけている。フィランデルは角をとって丸くしているが、たぶん丸い台石のあるウィトルウィウス流の柱基に似せるためであろう。トラヤヌス記念柱には頸部がなく、柱身の玉縁と柱頭のそれが混同されている。エキナスの下に玉縁と小平縁を置いているのはウィトルウィウスとスカモツツィのみであり、フィランデル、パラディオ、セルリオ、ヴィニョーラといったほかの建築家は小平縁がひとつあるだけである²⁷⁾。」

フィランデルとトラヤヌス記念柱を特殊例として除外すれば、ここでは柱頭のモーディングの問題として以下の 2 点が挙げられている。第 1 の問題はアバクスの形状であり、割型がなく平滑な場合(パラディオ、セルリオ、ウィトルウィウス)と、最上部に小平縁がある場合(ヴィニョーラ、スカモツツィ)がある。第 2 の問題はエキナスの下に割型であり、玉縁と小平縁がある場合(ウィトルウィウス、スカモツツィ)と、小平縁のみの場合(フィランデル、パラディオ、セルリオ、ヴィニョーラ)がある。

つぎに「比例」については以下のように述べている。

「比例についても建築家によってまちまちである。フィランデルのような建築家は、第 3 層²⁸⁾を、ウィトルウィウスなら頸部とエキナスの玉縁に与えるところを、コラム上端の玉縁と小平縁にもあてている。セルリオやヴィニョーラのような建築家は、第 3 層全体を頸部にあて、第 2 層は、ウィトルウィウスならすべてエキナスにあてていたところを、そこにエキナス下の小平縁をも含ませている。またパラディオのような建築家は、第 2 層²⁹⁾の全体をエキナスにあて、(頸部上端には)ウィトルウィウスなら玉縁と小

平縁を与えるが、小平縁のみを与えている³⁰⁾」

以上の 3 者の比較は前述の『建築十書』の挿図(図 1)における「A」、「B」、「C」にそのまま対応しており、前述の脚注を補足する形となっている。そしてペローは以下のように宣言する。

「こうしたきわめて多様な諸例から、ウィトルウィウスの手法を選んだ。それはより心地よく、柱基よりもやや装飾豊かで、それより簡素ではないという、すべての柱頭に共通する原理や法則に一致する。というのは、ウィトルウィウスがエキナス下に置いた玉縁がなければ、トスカナ式柱頭は柱基と区別がつかなくなるだろうからである³¹⁾」

こうしてペローが提案した柱頭(図 12)は、自身が翻訳した『建築十書』の<Planche XXXII>において示したもの(図 1)とほぼ同じである。ウィトルウィウスには次の 3 点で従った。アバクスには割型がなく平滑であり、エキナスには柱頭の 1/3 の高さの全部が与えられ、頸部の上端にも柱身の上端と同様に玉縁と小平縁がある、という 3 点。これはペローによるウィトルウィウス解釈にして、実質的なペロー案でもある。

ペローはウィトルウィウスのテキスト批判をおこない、イタリア・ルネサンスの建築書を検討しつつ、セルリオとは異なる新しいウィトルウィウス解釈を提案した。すなわち柱頭は 3 層に等分され、第 1 層のアバクスには割型がなく、第 2 層全体はエキナスにあてられ、第 3 層の上端には玉縁と小平縁がある。

4.3 フランソワ・ブロンデル(図 11)

初代教授ブロンデル³²⁾は『建築教程』第 I 部(1673)第 II 書の第 I 章において、ウィトルウィウスとその注釈者にもとづく比例の例を紹介している³³⁾。エキナス下の割型は小平縁のみである。またそのエキナスと小平縁の合計で、柱頭の三分の一の高さが与えられているという点で、むしろセルリオとヴィニョーラの柱頭に近い。すなわち彼は、セルリオ解釈にもとづくウィトルウィウスに準拠している。

4.4 フィリップ・ド・ラ・イール(図 13)

2 代目教授ラ・イール³⁴⁾は講義録『市民建築』(1690 年代)のなかで、この柱頭は建築家ごとの違いは少ないが、アバクス上端に小平縁を置く建築家と、割型なしでアバクスを完全に四角にする建築家に大別されるとした³⁵⁾。すなわちペローと同様の比較をした。彼はアバクスに小平縁があるものとなないものを並置した(図 13)³⁶⁾。またドロームが『建築第 I 巻』第 V 書第 1X 章で紹介した柱頭(図 9)に言及し、小平縁が厚すぎると批判している。そして、アバクス上端に小平縁をもってくることは、むしろドリス式柱頭にふさわしいと指摘した³⁷⁾。

「トスカナ式の柱頭の起源はドリス式の柱頭にあり、図 14 に見られるように、そのすべての割型も比例もそこ(ドリス式柱頭)からとられたものであることは、容易に見てとれる³⁸⁾」

しかし第 2 層にはエキナスと小平縁が含まれており、エキナスは薄いことを考えれば、ラ・イールはペロー的解釈ではなく、やはりセルリオ的解釈でのウィトルウィウスに準拠したと考えられる。アバクス上端に小平縁のある例はヴィニョーラのものとの類似性が強いが、ラ・イールが、前述のように、割型のない簡素なアバクスがトスカナ式にふさわしいと述べていることは、この仮説を補強するものである。

以上から、ペロー独自のウィトルウィウス解釈に準拠する立場と、ブロンデルやラ・イールのようにやはりセルリオ解釈にもとづくウィトルウィウスに準拠する立場という、ふたつの立場があった。

5. アカデミーにおける見解の変化

5.1 セルリオ的解釈からペロー的解釈へ

アカデミーは1676年12月7日の会合において、ドロルムが『建築第Ⅰ巻』第Ⅴ書第Ⅵ章で説明した柱頭(図8)が「ウィトルウィウスの柱頭に一致する」と指摘し、柱身上端のみに玉縁があり、第2層がエキナスと小平縁にあてられるその柱頭を認めた³⁹⁾。ただし翌12月14日の会合では、同例の柱身上端の玉縁において、張出しと厚みが等しいので「たいへん不快な効果」を与えることが指摘された⁴⁰⁾。

しかし1681年6月9日の会合では、ペローが提出した問題が検討された。まず、フィランデル版ウィトルウィウス建築十書におけるトスカナ式柱頭を検討し、彼が「第3の1は玉縁とアポテシスを含む頸部にあてられる」と修正したこと、またその玉縁とアポテシスの間に小平縁を挿入したことを賞賛したが、頸部の下にその玉縁とアポテシスを置き、本来は柱身の一部であるそれらを柱頭の第3層に含めてしまったことはまったく認めることができない、とした。いっぽう「ペロー氏の図版」に見られるような、エキナス直下にも柱身最上端にも玉縁と小平縁の組合せがある方法を「最も繊細で詳細に検討された作品における、ほかのいかなるものより好ましい」と判断した⁴¹⁾。

また続けて、パラディオの例にも触れて、エキナス下には小平縁だけがあるが、これは「最も堅固な大規模建物なら」使用することができるとした⁴²⁾。すなわち玉縁がなく、刳型がより単純なパラディオの柱頭は、限定された用途なら認められるとした。

この会合ではペロー解釈によるウィトルウィウスが支持を得た。

5.2 アカデミーの態度の変化

しかしそののち、ペロー評価の態度はなくなってゆく。まずアバクスは1/3Mよりも厚くあるべきだという主張がなされるようになった。

1695年12月19日の会合では、ダヴィレ訳『スカモッツィの建築の5つのオーダー』の17章が講読され、「柱頭のアバクスはその下の刳型と比べて弱すぎる」という判断がなされた⁴³⁾。スカモッツィの柱頭のアバクスは高さが1/3M以上(10P1/2)であり、小平縁がある。いっぽう頸部の上部には玉縁と小平縁がある。したがって刳型がある場合は、1/3Mより大きい10P1/2という値でも小さいと、アカデミーが判断したことが推察される。

1696年7月16日の会合ではブロンデルの『建築教程』第Ⅰ部の第Ⅱ書が講読された。この第Ⅱ書はトスカナ式オーダーを論じているが、第Ⅲ章では、パラディオによるトスカナ式オーダーとして、その『建築四書』のく図I-12に示されたもの(図6)を取り上げて検討している。ここでアカデミーは、パラディオが言及した「3種類のトスカナ式の柱頭と柱基⁴⁴⁾」から「最も美しくないもの」をブロンデルが取り上げた、と述べている⁴⁵⁾。アカデミーはこうした刳型や装飾が多すぎる柱頭を好まなかったことが推測される。つづいてエキナスについては、パラディオやペローのように1/3Mという大きな値ではなく、やはりセルリオのような1/4M($1/3 \times 3/4 = 1/4M$)といった薄いものが支持されるようになった。

1699年11月4日の会合では、パラディオの『建築四書』第Ⅰ書が講読され、そのトスカナ式柱頭がふたび検討された。彼が提案した最初の例⁴⁶⁾(図5)についてアカデミーは以下のように指摘した。

「柱頭のエキナスは、アバクスや頸部にたいして高すぎる⁴⁷⁾」

実際、この柱頭において、エキナス単独で厚さ1/3Mであるから、

セルリオやヴィニョーラでは1/4Mであるのと比較して、厚い。つまりアカデミーは、薄いエキナスを望んだ。

1681年6月9日の会合で承認されたペローによるウィトルウィウス解釈では、エキナスの厚みはまさに1/3Mであったから、これはアカデミーの態度が変化したことを物語っている。またパラディオが「ヴェローナの闘技場から引用した」第2の例(図6)はやはり「その輪郭も比例もけっして従うべきではない」とした⁴⁸⁾。やはり刳型が多すぎる柱頭は好まれなかったことが推測される。

以上からアカデミーはトスカナ式柱頭については、刳型の少ない単純な形を好み、第2層がエキナスとその直下の小平縁を含むような、薄めのエキナスを好むようになったと考えられる。

5.3 ヴィニョーラとマンサールによる比例

1701年よりトスカナ式オーダーの比例が体系的に再検討された。

1701年1月4日の会合では、この主題について1699年になされた議論の記録が再読され、このオーダーの「すべての部分」について議論なされた。アントワヌ・デゴデ⁴⁹⁾は、アカデミーの検討のたたき台となり清書され模型化されるべき図面を作成するよう要請された。これは建築総監の要請によるものという記載が見られる⁵⁰⁾。

1701年1月11日の会合で、デゴデは図版を提出した。そこではトラヤヌス帝の記念柱のトスカナ式オーダーも議論された⁵¹⁾。同月24日の会合でもデゴデが別の種類のトスカナ式オーダーの図版を提出した。アカデミーはそれを検討したが、議事録の記載からは、それがどんな内容であったかは不明である⁵²⁾。

ところで1701年3月21日の会合では、オーダーのエンタブラチュア/コラムの高さ比にかんする最終的な決定がなされたが、それはトスカナ式とコンポジット式をのぞくドリス式、イオニア式、コリント式という主要3オーダーについてであった⁵³⁾。これはフレアール・ド・シャンブレ⁵⁴⁾が『古代建築と近代建築の比較』(1650)で、ギリシア起源のこれら3オーダーのみが建築オーダーとして認められると主張したこと⁵⁵⁾を反映したものであった。この文脈では、トスカナ式オーダーを議論すること自体が意味をなさなくなる。

1706年5月31日の会合では、そのド・シャンブレの『比較』が講読された。トスカナ式オーダーはどんな建物にも使用してはならないこと、円柱ならトラヤヌス記念柱のような記念碑にのみ使ってよいこと、この記念柱が最も美しい例である、とド・シャンブレが述べていることが確認された。

この見解にたいしアカデミーは、トスカナ式オーダーは諸オーダーのなかでも「それ固有の性格 *son caractère particulier*」を持ち、「ヴェルサイユ宮のオランジュリにあるようなとても大規模な建物」なら使ってよいと指摘し、トラヤヌス記念碑については、その比例はドリス式のそれに近いから、純粋なトスカナ式ではないとした⁵⁶⁾。

オランジュリ(オレンジ用温室)は当時の宮廷生活には欠かせない重要な施設であったが、ヴェルサイユ宮のものは(図16)はルヴォーを継いだフランソワ・マンサール⁵⁷⁾の設計にもとづいて1688年に完成された。アカデミーは、トスカナ式オーダーは使ってはならないというド・シャンブレの指摘に注意を払いながらも、トラヤヌス帝の記念柱という古代建築の例ではなく、王室建築においてすでに使用された例は正当化しようとした、と考えられる。

その次の1706年6月7日の会合でも『比較』が講読され、パラディオ、ヴィニョーラ、スカモッツィ、セルリオのトスカナ式オーダー

が比較された。アカデミーは、パラディオが提案したトスカナ式オーダーのなかでヴェローナの闘技場を引用したものは「良い効果を与えない」、スカモッツィのオーダーは「割型が多すぎる」、セルリオのものは「エンタブラチュアがあまりに単純で割型が少なく、オーダーとは思えない」、と批判した⁵⁸⁾。

しかしヴィニョーラにかんしては別の評価を与えた。

「トスカナ式オーダーについては、ヴィニョーラのものだけが、それに従うことで成功を収められるものであり、彼の図版においてはすべての部分が輪郭も比例もよい⁵⁹⁾」

これはオーダー全体にかんする判断であり、柱頭のみにかんする言及ではないが、当然、承認された「すべての部分」には柱頭も含まれるであろう。だから柱頭についてもヴィニョーラのものが最善であると判断したと考えられる。

ここで注目すべきは、ヴェルサイユ宮のオランジュリのトスカナ式柱頭は、割型の種類と位置において、あるいは柱頭幅がウィトルウィウスの規定した 2M (=60P) よりもかなり広い点などにおいて、ヴィニョーラのものに類似していることである⁶⁰⁾。すなわちアカデミーは、この王室建築のトスカナ式オーダーを正当化しようとし、そのためにそれに類似したヴィニョーラのものを承認した、という可能性が強い。

5.4 デゴデの比例体系

アカデミーがこのオランジュリやヴィニョーラの柱頭を承認した状況証拠が、第3代教授デゴデによる柱頭である。彼は上述の一連の会合においてアカデミーの指示にもとづいて図面を作成し提出していたが、その講義録『建築オーダー書』(1717年以降)のなかの、トスカナ式オーダーを扱った第3章において提案した柱頭(図14)は、アバクス上端とエキナス下に小平縁があり、柱頭全体の幅も大きいという点で、それらに類似している⁶¹⁾。

またこのデゴデの柱頭は、3層の高さの比が11/9/10であり、アバクスは通常より厚い。エキナス層は通常より薄く、さらにこのエキナス層にはエキナスとその直下の小平縁を含むから、エキナス自体はかなり薄いものとなっている。そしてヴェルサイユ宮のオランジュリの例(図16)において、アバクスはほかの2層よりも厚いことを考えれば、このマンサールの作品が参照された可能性も考えられる。

さらにこれらの特徴は、前述の1695年12月19日の会合において厚いアバクスが求められたこと、また1699年11月4日の会合において、パラディオの柱頭のエキナスが厚すぎることが批判されたこと、すなわち薄いエキナスが求められたこと、と整合する。

デゴデはこの第3章の冒頭の部分で、このオーダーがギリシアの3オーダーのひとつではないことを指摘し、古代建築にはその類例はないがウィトルウィウスが言及しているので述べる、とやや釈明じみた説明をしたのち、このオーダーを使ってもよい建築について説明している。すなわち、「単純性」を特徴とするトスカナ式は、いくつかの例外は別として、原則として室内には使用してはならないと指摘したのち、以下のように続けている。

「それは堅牢に見える必要のある屋外のファサードの地上階にはより適合するし、都市門や防壁門、オランジュリ、庭園のテラスの装飾や、そのほかの簡素であることが望ましい建物では、このオーダーは使用されてよい⁶²⁾」

前述の1706年5月31日の会合でアカデミーは、トスカナ式オーダー

を一般論としては否定しながら、ヴェルサイユ宮のオランジュリにおける例は承認したわけだが、デゴデはその論法をそのまま繰り返している。したがってデゴデがその具体的な比例体系においても、このオランジュリの例を参考にした可能性は大きいと判断される。

6. 第2期

この時期、この柱頭にかんする言及はアカデミー議事録にはほとんどなく、第1期の判断がそのまま有効であったと考えられる。

ミシエル・タヌヴォ⁶³⁾によるトスカナ式オーダーの図版⁶⁴⁾(図15)は、寸法は記されていないが、図版を直接実測したかぎりでは、エキナスとその真下の小平縁が全体高さの約1/3であると薄く、アバクス上端には小平縁がある。この柱頭はデゴデのそれに類似している。また前述のヴェルサイユ宮オランジュリの例が、1743年12月23日の会合で、ふたたび議論の対象となった。議事録によれば、タヌヴォがトスカナ式オーダーの清書した図面を提出したが、「ヴェルサイユ宮の迷路園むかひのオランジュリで建設された同種類のオーダーの図版(複数)にもとづいて、このオーダーは描かれた」のであった⁶⁵⁾。

フランス学士院古文書室の建築アカデミー関係の資料「ボジール文書 Papiers Beausires」には、「マンサール氏による、迷路園の隣のオランジュリのトスカナ式オーダー、ロリオ作図」と題されたと図版が2枚ある。1枚はトスカナ式オーダーの柱頭と柱基の詳細図(図18)であり、もう1枚はエンタブラチュアと柱頭をヴィニョーラのものと比較したもの(図19)である。これら二葉の図面は寸法が記されているので、マンサールの柱頭を復元し清書することができる(図17)。アバクス上端に小平縁があり、アバクス層が最も厚く、小平縁を含むエキナス層と頸部はそれよりも薄い。

ここで「迷路園 labyrinthe」とは、コの字平面のオランジュリの中庭の庭園のことであると考えられる(図16右)。この「ロリオ⁶⁶⁾作図」のものと、別の資料に見られる同じトスカナ式の柱頭を示した図(図16左)と比較すると、柱頭幅は異なるが、高さ関係や割型の種類はほぼ同一である。

ロリオ作図とされるこの図版が、1743年12月23日の会合で提出された図面と同一のものかもしれない。議事録は、タヌヴォが会合に図面をたんに「提出した」とし、彼が作成したとは記していない。1743年の時点でロリオは第2部会員、タヌヴォは第1部会員であったから、ロリオがタヌヴォの指示によって作成した可能性は否定できない。

またそれが1743年の会合に提出された図版と同一ではないとしても、1748年からアカデミー教授となったロリオが、第1期で承認されたヴェルサイユ宮オランジュリのトスカナ式柱頭をふたたび描いたのであるから、第1期で承認された比例はこの時期でもやはり有効であったと考えられる。

7. 柱頭幅などについて

森田慶一訳『ウィトルウィウス建築書』第四書第七章の第3節では、柱頭すなわちアバクス全幅は2Mと規定されている。また同第七章2節では「柱は頂で下部の太さの四分の一だけ縮められる」とあるから、上部直径は下部直径の4分の3、すなわち45Pであり、その半径は22P1/2だから、柱身表面からの柱頭の張出しは7P1/2である。

セルリオはこの規定に忠実であった(図3)。ヴィニョーラは柱頭幅をかなり大きくしている(図4)。スカモッツィは、アバクス上端

に小平縁をつけることで「(柱頭の) 張出しが少し大きくなる⁶⁷⁾」と述べている。実際、ウィトルウィウスよりは柱頭全幅が 2P だけ大きい。

またドロルムの第 2 例 (図 9) では、コラムの直径減衰率が 4/5 と通常の 3/4 よりも小さいので、柱身の上部半径が 24P と大きく、柱頭半幅も 31P/2 と大きめであり、ウィトルウィウスとは異なっており、ドロルム自身「こうしたことは柱頭の張出しを大きくするためには適切である⁶⁸⁾」と述べている。

アカデミーにおいては、ブロンデル以外のペロー、ラ・イール、デゴデは幅を大きくしている。ヴェルサイユ宮オランジュリのは、ウィトルウィウスのものより幅が広く⁶⁹⁾、それによって幅の大きな柱頭があらためて承認されたということも考えられる。これは第 2 期においても顕著な傾向であり、タヌヴォやロリオにおいても柱頭幅は 2M よりもかなり大きい (図 15, 17-19)。ルネサンス以来、柱頭幅をウィトルウィウスの規定より大きくしようという傾向はあったが、アカデミー会員たちもそれを望み、マンサールの作品を承認するというかたちで、間接的にそれを承認したと考えられる。

8. まとめ

ルネサンス以降、トスカナ式柱頭にかんする議論は、ウィトルウィウスが残した曖昧なテキストをいかに補完するかという方向で進んだ。そこではセルリオの解釈が一般的であったが、ヴィニョーラやスカモッツィはそれとは異なる解釈を示した。

ブロンデルはウィトルウィウスをセルリオ的に解釈しようとしたが、ペローは、そのテキスト批判を基礎に、セルリオとはまったく異なる解釈を提案した。アカデミーは一時的にはその解釈を認めた。

しかし 1700 年前後ではドリス式、イオニア式、コリント式という主要な 3 オーダーだけが建築のオーダーであるというド・シャンブレの考え方をアカデミーは無視できないようになった。そのときマンサールというフランス古典主義建築を築いた建築家の権威をもって、ヴェルサイユ宮オランジュリのトスカナ式柱頭だけは承認された。ヴィニョーラの柱頭は、マンサールの比例に最も近かったから、承認された。デゴデはアカデミーが認めた比例を図化し、第 2 期においてもタヌヴォやロリオはそうした比例に近い柱頭を提案した。

以上からトスカナ式柱頭にかんする議論においても、当初はウィトルウィウスという古代のテキストを典拠として比例を決定しようとしたが、第 1 期の後半には 17 世紀のフランス古典主義建築を根拠とするようになった。オーダー理論全般については、序で述べたように、第 1 期が古代志向、第 2 期がフランス建築志向というパラダイムであったから、トスカナ式柱頭にかんする議論の変化は、時期的には、全体的な議論の変化にむしろ先行していたと考えられる。

しかしそれはトスカナ式が模範的なオーダーであったからではなく、上記のド・シャンブレの見解を承認したアカデミーにとって、そのトスカナ式は、オーダー体系全般のなかでは、いわば例外的で特殊なオーダーであったからである。宮殿建築や一般の公共建築にはふさわしくないこのオーダーは、オランジュリなどの例外的な建物には使うことができる類のものと、みなされたからであった。

だからそこでマンサールの建築が参照されたとしても、そこにフランス的造形の特徴をみるという積極的な態度ではなく、そこに正当化を求めるという、どちらかといえば消極的な参照であったと考えられ

る。この点で第 2 期におけるフランス建築志向とはニュアンスを異にしている。

注)

凡例：

B.I.F. = Bibliothèque de l'Institut de France (フランス学士院図書館)

P.V. = Procès-Verbaux de l'Académie Royale d'Architecture, tome I-X, éd. par Henri Lemonnier, 1911-1929 (建築アカデミー議事録)

- 第 1 期は、ウィトルウィウス、アルベルティ、パラディオ、ドロルムらの著名で権威ある建築家の建築書を順に講読してゆくことがなされた。この時期のパラダイムは、ローマの古代建築を参照し、諸例を比較しつつ、オーダーの体系化を完成させることであった。第 2 期においては、古代建築はほとんど参照されず、マンサールらフランス建築が参照され、ペー・コラムなどフランス的なモチーフの比例が論じられ、それらを成立させる建築オーダーの比例体系が決められた。拙稿『アカデミー第 1 期(一六七〇〜一七五五年)における建築オーダーの基本比例の歴史的総決算――フランス王立建築アカデミー(一六七〇〜一七九三年)におけるオーダー理論の発達過程に関する研究(一)』建築史学第一六号、1991 年 3 月、pp.21-23、参照。
- アバクス(仏 *tailloir*; 英 *abacus*) は平滑な場合と、上端に小平縁(*filet*)がある場合とがある。
- エキナス層には、四分の一円をなすオヴォロ(*ove*)輪郭のエキヌス(*échine*)がある。その下には刳型がある場合と、ない場合がある。刳型は、小平縁(*filet*)の場合と、玉縁(*astragale*)と小平縁の場合とがある。
- 頸部(*gorgerin*)は刳型を含む場合と、含まない場合がある。その下の玉縁と小平縁は多くの場合、柱身に属する。
- 森田慶一『ウィトルウィウス建築書』p.107
- 森田前掲書、p.324、訳注 6、及び p.326、訳注 41
- Sebastiano Serlio, *The Five Books of Architecture*, (English translation) 4th book, 5th ch.
- 長尾重武編『ヴィニョーラ 建築の五つのオーダー』第 VIII 章
- Palladio, *Les quatre livres de l'architecture*, traduit par Fréart de Chambray, 1650, liv.1er, ch.XIV, p.46
- op.cit., liv. 1er, ch.XIV, pp.48-49
- Les cinq ordres d'architecture de Vincent Scamozzi*, traduit par D'Aviler, 1685 p.56; アカデミーが参照したダヴィレ訳のフランス語版による。なおオリジナル版は Vincent Scamozzi, *L'idea della architettura universale*, 1615
- 3 層がなるだけ等分に近くなるように分配すれば、エキナス直下の玉縁はエキナス層に、平縁は頸部に属すると考えられる。実際、フランソワ・ブロンデルは『建築教程 *Cours d'architecture*』第 I 部(1675)第 II 書でスカモッツィのこの例を紹介するにあたって、そういう立場をとっている。
- スカモッツィの建築書には一般的に、ウィトルウィウスを批判する内容が多い。
- Philibert de L'Orme(c.1510-1570)
- Philibert de L'Orme, *Le Premier Tôme de l'Architecture*, 1567, liv.V, ch.VI
- Jean Bullant (c.1515/1520-1578)
- Jean Bullant, *Reigle générale d'architecture des cinq Manières de colonnes, à savoir Tuscanes, Dorique...*, livre enrichi de plusieurs autres à l'exemple de l'antique, 1654
- Claude Perrault(1613-1688)、前掲拙稿 pp.43-44 参照。
- plinthe*: 通常は柱基の下にあり、「台石」などと呼ばれるが、ここで柱頭の最上部にあるので、「角板」と呼ぶ。
- ペローは、原文のラテン語 *apophygi* を、フランス語の *congé* と訳している。ここで、ラテン語をフランス語化した *apophyge* という言葉は、円柱の上端や下端のすこし末広がりになった部分を意味し、「円柱のアポテシス」、「根広」と訳される。
- Les Dix Livres d'Architecture de Vitruve*, traduit par Claude Perrault, liv.IV, ch.vii, p.138
- Guillaume Philander(1505 一?), ドイツ生まれ。1544 年にウィトルウィウスを翻訳し、フランソワ I 世に献呈している。アカデミーは設立当初、このフィランド版を講読したが、その翻訳を信頼することができず、ペロー訳を読みはじめたという経緯がある。
- Perrault, op.cit., liv.IV, ch.vii, p.138, note 4
- idem.
- idem.
- ここではペローは、「性格」を刳型などの細部と同義に使っている。

- 27 Perrault, *Ordonnance des cinq espèces de colonnes selon la méthode des Anciens*, 1683, p.40
- 28 ここでは、3 等分された柱頭高さの最下部分を意味する。
- 29 原文では「第 3 層」と記されているが、内容から判断して「第 2 層」の誤りであると考えられる。
- 30 Perrault, op.cit., p.40
- 31 op.cit., p.40-41
- 32 François Blondel(1618-1686)、前掲拙稿 p.41 参照。
- 33 François Blondel, *Cours d'architecture*, Iere partie, liv.II, ch.I, p.19
- 34 Philippe de La Hire(1640-1718)、前掲拙稿 pp.41-42 参照。
- 35 La Hire, *Architecture Civile*, p.85
- 36 op.cit., p.14
- 37 op.cit., p.85
- 38 op.cit., p.86
- 39 P.V., t.I, p.126
- 40 P.V., t.I, p.127
- 41 P.V., t.I, pp.314-315
- 42 idem.
- 43 P.V. t.II, p.318
- 44 アカデミーはこれら「3 種類」が具体的になにに対応するかは明言していない。しかし『建築四書』第 I 書の<図 I・11>と<図 I・12>において、パラディオが描いたトスカナ式柱頭の輪郭図は、刳型の種類によってそれらは 3 種類に大別できる。Cf. Palladio, op.cit., liv.Ier, ch.XIV
- 45 P.V., t.II, p.331
- 46 Palladio, op.cit., liv. Ier, ch.XIII
- 47 P.V., t.III, p.81
- 48 idem.
- 49 Antoine Desgodetz(1653-1728)、アカデミー第 2 代教授。前掲拙稿 p.42 参照。
- 50 P.V., t.III, p.120
- 51 議事録の脚注によれば、*I Vestigi dell'antichità de Roma*, 1612 が参照された。cf. P.V.,t.III, p.121
- 52 P.V., t.III, p.121
- 53 P.V., t.III, p.124
- 54 Roland Fréart de Chambray(1606-1676)
- 55 Fréart de Chambray, *Parallèle de l'architecture antique et de la moderne*, 1650, pp.1-6
- 56 P.V., t.III, p.249
- 57 François Mansart(1598-1666)、フランス古典主義を代表する建築家であり、代表作はプロワ城増築(1635)やメゾン城(1642)など多徴。
- 58 P.V., t.III, pp.249-250
- 59 P.V., t.III, p.250
- 60 実際は 17 世紀の建築家マンサールが前世紀のヴィニョーラを模倣したと考えるのが自然であるが、それを証明する本論の範囲を超える。
- 61 Desgodetz, *Traité des Ordres de l'Architecture*, 1717- : ch.III, V dessein
- 62 op.cit., ch.III, p.37
- 63 Michel Tanevot(?-1762):アカデミー会員。1730 年代と 1740 年代、アカデミーの指示にもとづいて建築オーダーの図面を作成し、会合に提出した。前掲拙稿 p.44 参照。
- 64 B.I.F., Ms.1026.
- 65 P.V., t.V, p.352
- 66 Louis-Adam Loriot(?-1767)、1735 年 11 月 25 日より第 2 部会員、1748 年 4 月 22 日にアカデミー教授、1758 年 2 月 13 日に第 1 部会員。
- 67 *Les cinq ordres d'architecture de Vincent Scamozzi*, traduit par D'Aviler, 1685 pp.56-57
- 68 op.cit., ch.IX
- 69 ただし Alfred et Jeanne Marie, *Mansart à Versailles*, 1972 に収録された柱頭の図面(フランス国立図書館, Cabinet des Estmpes, Va 423 I.)と、ロリオが作成したものは柱頭幅がそれぞれ約 34P と 40P であり、かなり異なる。ただアカデミーはあくまでロリオの図面にもとづいて議論したと考えられること、ウイトルウィウスの柱頭よりも幅が大きいという点では、この議論の方向性と前者の図画が矛盾するわけではない。

(2002年12月4日原稿受理, 2003年4月23日採用決定)